

ほんとうに豊かな国になるための教科書

「認知症一行詩全国コンクール」の2010年入賞作品集

「いつもおおきん」によせて

認知症の人と接する上で、わきまえておかなければならない大切なことは何か、が分かってきました。

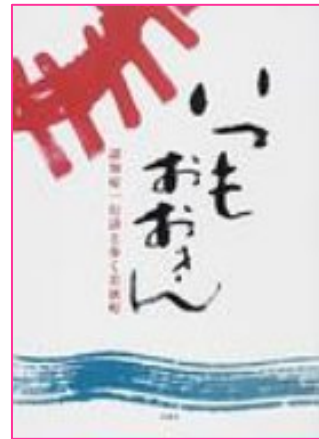
それは、記憶や知的能力が失われても、感情はしっかり残っている、ということです。

物忘れがもとで失敗したとき、自分が何をしたかまわりの人が何といったかは忘れてしまっても、優しく受け止められたかどうかはしっかり残ります。

誇りを傷つけられると、それが積もり積もって「異常行動」「問題行動」と呼ばれる振る舞いにつながってゆきます。

「異常」「問題」なのは、認知症のご本人なのではなく、ま

わりの人や社会のあり方であることが、学問的にも証明されるようになったのです。



若狭から始まった「認知症一行詩」は、超高齢社会の教科書。それも、感動が沸き上がってくる、かけがえない教科書です。

ひらがなで綴られた子どもたちの詩には、優しさがあふれています。

「僕のこと忘れてもいいから 長生きしてね」

「まってて おじいちゃん ぼくが いまに 治る薬つくるから」

「もうねる時間なのに ていねいにかみをセット 夢の中でおでかけするのかな」

介護を経験した家族の詩には、優しさと淋しさが混じり合っています

「おむつを当て始めの頃は Lサイズ、今はS 小さくなったね お母さん」

戦争体験の重さも伝わってきます

『助けてください、助けてください』 手をあわせて頭を下げるおばあちゃん

戦争はもう終わったよ 私 黒髪に戻すからね」

ユーモアが、介護者の心の疲れへの特効薬であることも教えてくれます

「海で保護された爺ちゃん 『風呂にいつてきた』とは スケールが違うね！」

『今日は上にぎり十人前だって 景気いいねえ』と

母の注文を聞き流してくれる近所の寿司屋さん ありがとう」

一行詩には、経験から生まれた智慧もぎっしりつまっています

「介護する息子のはげまし いたわりは 父に向かって『大尉殿』

背筋のばして 答礼する父」

「夕方になると『もう、そろそろ失礼します……また、あした……』と妻

『夕食でも食べて行きなさい』というと また坐り直す」

認知症ご本人からじっくり話をきく試みも始まりました。そして、ご本人がこんな哀しみの中にいることが分かってきました。

自分の話を聞いてもらえない
自分に尋ねてもらえない
自分に関心を持ってもらえない
尋ねたり、伝えても無視される
自分だけ蚊帳の外で、自分のことを周りが決めてしまう
自分の家にいたいのに、どこかに連れて行かれる

一行詩の中に流れている暖かい文化が日本中に広がったら、わたしたちの日本は、認知症になっても安心な、ほんとうに豊か社会になることでしょう。